

「他者」の思想

——ハックスレイの近作を中心として——

中野正順

オルダス・ハックスレイの評論集「アドウニスとアルファベット」(一九五六)のうちに、次のような大へん興味ある文章が見られる。

「デカルト哲学の全体系を基礎づけているものは、*Cogito ergo sum*——われ思う、故にわれ在り——の主張であった。これは尤もらしく聞こえるが、不幸にして真実ではない。実際は、フォン・バーデルが指摘したように、*Cogito ergo sum*ではなくして、*Cogitor ergo sum*（われ考えらる、故にわれ在り）である。私の存在は、私が考えていると云う事実の故ではなくして、それは、私の知ると知らざるに拘らず、私が考えられている——私が日常私自身と同一視している意識よりも、遙かに大きな心によつて考えられていると云つた事実の故に生じるのである。」

Descartes based the whole of his philosophy on the affirmation, *Cogito ergo sum* I think, therefore I am. This sounds good, but unfortunately it doesn't happen to be true. The truth, as von Baader pointed out, is not *Cogito ergo sum* but *Cogitor ergo sum*. My existence does not depend on the fact that I am thinking; it

depends on the fact that, whether I know it or not, I am being thought — being thought by a mind much greater than the consciousness which I ordinarily identify with myself.

ハックスレイの云っていることの要点は、我というものは我が考えるから存在するのではなくて、我々よりも大きなものによつて我々が考えられているから存在すると云うのである。これは、論理的思惟を排して直接経験を重んじるハックスレイの東洋的神秘主義の思想をよくあらわしている文章である。cogito は人間の論理的思惟の働きであり、cogitor はそう云つた人間自身の思惟ではなくして、人間の無意識に内在する他者の働きである。概念や思惟に關することがらではなく直観或は直接経験であつて、このことはハックスレイにとっては寧ろ信念或は信仰となつてゐるものである。こう云つた彼の信念或は信仰の対象となつていて何かしら自己を動かす所の自己以外のものでも自己に内在するもの、これを小論の標題に於て便宜的にわが国で用いられている哲学用語「他者」を以てあらわしておいたが、果して哲学の云う「他者」と同じものであるかどうかは議論のあるところだろう。それは此処では問わないが、ハックスレイは一九四五年の「永遠の哲学」に於ても最近の諸作のなかでもこれを No-I とか No-Self と云う言葉をもつてあらわしているから、寧ろ「非我」と呼ぶべきであろう。我のうちに在つて我に非ず、所謂外界のうちに存在するもののように感じられてその実外界に存在せず、我のうちに在つてしかも「彼方」Out There から、換言すれば我の意識や「はからい」を超えた所からやつて来るものである。普通 not-selves と複数であらわされているように、ハックスレイの考によれば、「非我」には種々な種類があり、従つてそれが発動する場合も色々あるのであるが（二三頁参照）、その際は神学用語の「恩寵」grace とか「変貌」transfiguration 或は哲学用語「他者の世界」otherness と云つた表現を使用している。例えば「知覚の戸」（一九五四）のなかで「仏性」「真如」「菩提」「涅槃」「第一義諦」など禅の所謂「見性開悟」に似た境地の無意識的展開をカソリックの「無償恩寵」gratuitous grace

であるとしてゐるのはその特例である。こう云つたハックスレイの「非我」の思想の性格とその由来を、更にそれに
関連して彼の禪的思想の特色を解明しようとするのがこの小論の目的である。

本論に這入るに先立って、是非此処に読者の注意をひいておかなければならないことがある。それは、一九二〇年
以来今日までのハックスレイの数ある著作のうち、一九四二年に出版された「見る技術」*The art of Seeing*と云う
一風變つた書物がある。これはハックスレイの他の著作と異つて、文学や思想に縁のない、眼の養生に関する本であ
る。彼はイートン在学中十六歳の時、白点状角膜炎 *Keratitis punctata* にかかつて殆んど失明状態になつた為め学校を
中退したが、その後小康を得て視力が或程度回復したので二年の後オックスフォード大学に這入り、最初の医学志望
を捨てて文学を専攻することになつたのは人のよく知る所である。だが彼の眼疾はその後もずっと続き、読書には事
欠かないとは云え、不自由な視力とそれから来る心身の緊張や疲労に悩まされて来たのであつた。だから彼の多彩な
文筆生活の反面には、眼疾による永い闘病生活があつたことを忘れてはならぬ。その間の眼疾とその闘病生活とが彼
の心身の生活に、従つて彼の著作に何等かの影響を与えなかつただろうか？ もし与えたとすればその両者の關係を
跡づけて見るのも、ハックスレイに関する興味ある研究課題の一つになるものと云えよう。兎に角、そうしているう
ちに一九三八年頃彼の眼疾は再び悪化して、視力の衰弱と疲労の増進を益々覚え、漠然とした不安と恐怖におそわれ
たのである。折しもアメリカの眼科医故 *W. H. べーツ* 博士の創始した視力再教育法の話を聞き一九三八年渡米して博
士の門弟 *マーガレット・コーベツト* 夫人の巧みな指導を受けた結果、彼の視力は著しく改善されたのであつた。それ
以来彼はカリフォルニアを永住の地としている。そしてハックスレイは自分の視力の改善に役立った *べーツ* 博士の視力
再教育法を世に広く知らせるためと、恩人 *べーツ* 博士と *コーベツト* 夫人に対する感謝報恩を目的として一九四二年に
この書物「見る技術」を出版した訳である。

だがこの書物は、前述したように、眼疾の治療の本であって決して文学や思想に関するものでないから、今日まで只ハックスレイの著書目録の一項目としてその名称が挙げられているわけ、これを読んだ人は余りないではなからうか？ 従来わが国に於けるハックスレイに関する研究書でも、彼の文学的伝記に関連してその書名が言及されている外、この書物を取りあげて論究したものは皆無と云ってもよい。筆者自身の眼にも、これは風変りの書物として写り今日まで手に取って読んだこともなく、但し数年前「知覚の戸」を読んだ時これと何か関連したものではないか知らんと一度手に取って見たが、その内容目録を一見した際何となく医学書めいた感じがしたので直ぐ様手放したものである。所が図らずもこの二・三年来筆者も、角膜炎ではないが或る種の眼疾にかかって視力に障害を覚えたので、その間幸にしてこの書物を精読する機会を得たのである。実に奇縁と云うべきである。その結果、筆者はそのうちの視力再教育に関する種々な技術と方法が興味深く読まれたばかりでなく、それらの技術や方法が拠って以て立っている原理のうちに重大な意義を発見したのである。これを結論的に云えば、ハックスレイは他者或は「非我」の思想を単に知識として知ったばかりでなく、ベーツ法によつて実際に体験したと云うことなのである。

然らば、視力再教育のベーツ・メソッドとは何か？ その原理と特質とはどう云つたものであるか？ それを簡単ながら此処に紹介しておく必要がある。先ず従来の眼科学では、その理論と実際の面で、見ると云う生理的な方面に丈、即ち眼と云う物理的な器官に丈力をそそいで、眼にものを見させる心と云つたことには全く注意を払わなかつたのである。これに反してベーツ法では、視力の心理的な面を強調する。一体人間がものを見るのは、心が、眼と神経系統の助けによつて外界の出来事を知るのである。換言すそば、見るといふことは三つの補助過程——感覚し、選択し、知覚する過程（感覚十選択十知覚＝視覚）に分析されると云う。

(一) 感覚されるものは、見るための原料とも云うべき一連の感覚素（色素斑の一種）である。

(二) 感覺された一連の感覺素、即ち視野のうちから選択作用が起る。それを生理的に云えば、網膜の中心部(黄斑部)で最も明瞭な像が記録されるのである。

(三) 選択された感覺素は、外界に在る物理的物体として知覚される。

そして外部の物理的物体とは何の関係もない単なる感覺素を選択して、網膜の中心部でそれを外部空間中の物理的物体として解釈するものは、われわれの心である。この解釈する力即ち心とは、われわれのうちに蓄えられた経験とそれを止めおく記憶力である。だから見る、とは、我即ち現在の自我意識が見るのではなくして、ほんとうは我のうちに蓄えられた経験と記憶とが我に見させるものであると云えよう。所が實際はこの見させる心は、只記憶ばかりでなく、それ等にいろいろな欲望や習慣が附加されて複雑なものとなっている。従つて見る、働きが行われる際には、實際は眼の使用ばかりでなく、心の使用に於て正しい方法と正しくない方法とが生れる訳である。就中、心と眼の使用が正しく行われない場合は、緊張と疲労を生じて視力に悪影響を及ぼす。眼の場合で云えば、例えば余り酷使したり、照明が不充分であったり、姿勢が不自然だったりすると疲労を生じて、視力を傷める。心の場合で云えば、例えば物事を旨くやろうと余り一生けんめいになったり、失敗をしやすいかと不必要に心配するなど余り緊張すると視力を弱める。こう云う風に過度の疲労や緊張が視力に悪い影響を与えることは、日常よく我々の経験することである。殊に、自我が多ければ多い程、神はますます少なくなると云つた宗教上の信仰は、この視力の場合にも発見されたのであつて、余りいらだつたり、激しく怒つたり、日夜脅かされたり、余り苦しんだり悲しんだり、不必要にあせつたりする——こう云つたいろいろの自我意識を、ベーツ法では「否定的感情」negative emotions と呼び、これが視力に一番障害を引起すと云っている。

こう云つた観点から視覚再教育の種々な具体的方法が取られる。爰にはその具体的説明をしている余白がないためこれを省略するが、要するに「否定的感情」に溺れないと云う一種の自己否定を行うことによつて正常の視覚を回復

すると云うのがベーツ法の原理である。この精神は、ベーツ法では又心身の緊張緩和、即ち「弛緩」relaxationと云う形を以てあらわされている。そして弛緩には、「被動的弛緩」passive relaxationと「能動的弛緩」positive relaxationの二つに分けられる。「被動的弛緩」は、凡ての心身の努力から解放する、即ち「ほぐす」let goの気持を抱いて完全な休息状態に這入るのである。だがこれだけでは効果が十分でない。いつまでもこの状態にいる訳に行かないので、理想とする所のは弛緩と活動をうまく組合せたもの、即ち正しい自然の活動と組合せられた心身の弛緩であつて、これが「能動的弛緩」である。例えば物を見ても自分の方から無理に見ようとせず、物の遠近と運動とに視覚を自然に順応させて見るのである。そしてこう云つた原理と方法の底に更に流れているものは、この書物の巻頭に掲げられている言葉「医学は保護し、自然は癒す」Medicus curat, natura sanatの精神であり、また書中の言葉「自然の治癒力」vis medicatrix naturaeのうちに表示されている自然力に対する信念である。この「自然の治癒力」は我々自身のうちに存在する力であつて、これはハックスレイが近作「アドウニスとアルファベット」のなかで列挙している「非我」の一つ「肉体的非我」vegetative soul or not-selfと云つたものに相応する(一三頁参照)。これが無ければ医学も、ベーツ法も何等の役に立たないだろう。そして前述の如く、見るとは我々自身が見るのでなく我のうちに蓄えられた経験と記憶とが見ると云つたが、ハックスレイはまた「アドウニスとアルファベット」のなかで、これを「個人的非我」personal not-selfと呼んでいる(一三頁参照)。だからベーツ法は、正常な視力回復には人々をして自分から無理に見ようとする努力を止めさせ、或は種々な「否定的感情」から自我を解放させることによつて、このような「非我」の力を発動させることを治療の最大条件として云うことが出来よう(眼の調節は硝子体の彎曲の変化にし、ベーツ博士は屈折状態は一定不変のものでなくて変化していること、即ち屈折の変化は眼の外部の筋肉の伸縮と組織によつて生ずるもので、従つて視力障害は精神的現象であつて脳中枢の病気が黄斑部をおかし、ひいては網膜全体をおかすと説くこの学理に基づく彼の視覚再教育法に対する批難はハックスレイの反駁は「見る技術」(附録(一)を参照)。

ハックスレイはこの視覚再教育法を受け始めてから二・三カ月もたないうちに、日頃の緊張と疲労をすつかり忘れて視力が以前の二倍に回復したということである。これは彼に闇黒の憂うつからの解放の喜びを与えたのみならず、彼にとっては実に回心的な意義を有つ重大な出来事だったのである。後日ハックスレイは述懐したように、それは彼にとっては最高の意義と重要性をもつたのである。何故ならば或る特別な領域で一つの環境の奴隷となるかわりに、その主人公となる事が出来る可能性を實現するものであつたからである。即ちベーツ法は、われわれの生活環境に於て、怒り、悲しみ、苦しみ、不安、恐れ、あせり、貪欲と云つた彼の所謂「否定的感情」から解放されて、明知の境地に至る所の自由の勝利を獲得する心理的技術の知識と体験を与えたのであり、またそれによつて、視覚に關してではあるが、一種の他者或は「非我」の實感を彼に味わしめたのである。これは広くハックスレイの生涯に於て重要な出来事であり、従つてその書「見る技術」が更に別の深い意義を以てわれ等の眼前に登場して来るのである。

この別の深い意義を考える前に、ハックスレイがベーツ法によつてその一端を体験した他者或は「非我」なるものの性格を今此処に、近作「アドウニスとアルファベット」及びその他の作品によつて一応まとめておく必要がある。

我々人間は矛盾の存在物である。第一に心身から成つてゐることのために、人間は動物と神との生活を同時に営んでいる。また人間は、自我中心のであると同時に社会性をも有している。更にまた元来自然の創造物でありながら、人間は自己の運命を開拓して行く力を持つてゐるなど——こう云つた人間の持つてゐる矛盾或は兩棲的性格から、いろいろの人間の困難、錯誤、非行、犯罪、愚鈍が数限りなく世の中に存在する。就中、こう云つた悲惨な性格を引起す人間の諸種の矛盾のうちで最も力の大きなものは、諸々の欲望や概念に捉われた日頃の自分即ち「意識的自我」*conscious self* と、そう云う無明の塵埃から汚れてゐない無意識的自我即ち「非我」*not-self* との二つから成る兩棲的性格である。そして此の「非我」と云われる、無意識のうちに我を動かすものは、実は次の六つの種類に分けられる。

(一) 「個人的非我」 personal not-self

個人のうち蓄えられた色々の経験や記憶が環境に対して反射的に発動する力。ベーツ法に於て見る、働きを行う力はこれに属する。この「非我」はまた精神病学の取扱う潜在意識の分野である。

(二) 「肉体的非我」 vegetative not-self or soul

これは肉体の自然の働きや生長を司る力。われわれが見るとか、歩こうとする時に見させたり、歩かせたりする「非我」。われわれの呼吸、鼓動、分泌の作用を司る「非我」。それから病気を癒す所の「非我」即ち「見る技術」のなかでハックスレイが「自然の治癒力」vis medicatrix naturaeと呼んでいるもの(一一頁参照)。これ等の「非我」全体は彼が「永遠の哲学」*The Perennial Philosophy* (一九四五)その他で「動物的恩寵」animal graceと呼んでいるもの、或はアリストテレス哲学の所謂「エンテレキア」entelechyに相当する。

(三) 「霊感的非我」 inspirational not-self

古来の哲学者や文人に恵智や洞察力、靈感や創作力を与える力。

(四) 「原型的非我」 archetypal not-self

霊感的なものよりもさらに一段高次な「非我」で、人間のうちに最も深く根ざしている諸種の傾向。昔から永久に潜んでいる矛盾や遍在する問題を象徴しているユングの所謂「原型」archetypesに相当する。

(五) 「直観的非我」 visionary not-self

古来の宗教家が「来世」とか、「あの世」とか、「天国」とか、「地獄」と呼んだ世界、即ち日常生活に於けるわれわれの自我意識を超えた世界に住する神秘的な「非我」。しかもこれはハックスレイが「天国と地獄」(一九五六)のなかで「直観的経験」visionary experienceと呼んでいるものに相当し、われわれが善悪の対立から完全に脱却し得ないで、時に天国として観ずるこの神秘的経験も、恐怖とか貪欲によつて一挙暗転して地

獄に化すと云った「非我」で、次項の「普遍的非我」と呼ばれる究極理想の「非我」から一步手前のものであるハックスレイが「知覚の戸」の中で「無償恩寵」と呼んだメスカリンによる法悦境(二三頁参照)もこれに属する。

丙 「普遍的非我」

今まで述べた諸種の「非我」の上に位し、凡ての精神や物質即ち宇宙の内外に遍在する所謂「聖靈」、「法身」、「如来」、「真如」、「本来の面目」、「第一義諦」など何れも自分の本性、自我本来の性質を云い現わしたものに相当するものであって、これは人間の本質であり、人間最高理想の姿である。最高理想は人間にとって実現不可能のものであるが、常にそれを目指して向上努力するよう人間を刺戟鞭撻するものである。

人間は、右に列挙した六つの「非我」の総合的「非我」と、自己の周囲の環境に即応して生起する「意識的自我」との相互關係に於て生活している。即ちこう云った「非我」と「自我」との両棲的存在物なのである。そしてこの際「非我」殊に「個人的非我」と「肉体的非我」とは、人間の現在の姿「意識的自我」の呈する種々様々な恐怖、貪欲、憎悪、悪意と云った「見る技術」の中で云われている「否定的感情」negative emotions に毒されて、心身の病的状態に陥っているのが現実の人間であり、そのように歪められた「個人的非我」と「肉体的非我」とが現実の「意識的自我」と一所になって、いろいろな錯誤や非行を犯しているのが現実における人間の病的な姿である。換言すれば、これ等「個人的非我」と「肉体的非我」と「意識的自我」との間に平衡關係が存在する時に人間の心身が健康状態を呈するのである。このように(一)(二)の「非我」は「意識的自我」によって歪められて現実の人間の姿(仮我)を呈するものとすれば、(四)(五)の「非我」は歪められた(一)(二)の「非我」や「意識的自我」に毒されないで人間の本質(真我)を形成するものである。しかし歪められた(一)(二)と「意識的自我」は(四)(五)の放つ高貴な内的光明 inner

「自己」を曇らし、われわれの自我意識と超越的非我との間に不透明な障壁を立てて、自我本来の性質——禪の所謂「真我」の体得を邪魔するのである。即ちこの障壁がとれた時が見性成仏であり、「真我」の状態であり、頓悟の境地である。そして障壁に隔たれた時が、妄想や虚妄に捉われて煩惱の大海に沈溺する「仮我」の状態である。これはまたハックスレイの著「天国と地獄」のなかで描かれている天国と地獄の境地であって、われわれ凡人は平素この天国と地獄との間にはさまれた両棲的存在物なのである。

人間はこう云った両棲的存在物であるとは云え、主としてこの障壁に邪魔されて無明の生活を送っているのが日常における我々の状態であって、ハックスレイはこの障壁を排して最高の「非我」の世界に到達することを以て人間の最高理想としている。そして虚妄に充たされた「仮我」を脱却して「真我」の世界に這入ることを以て個人並に社会救済の道であるとする彼の東洋神秘主義的思想が顯著にあらわれたのは、戦前では「ガザに盲いて」（一九三二）と「目的と手段」（一九三七）から始まって「永遠の哲学」（一九四五）に至る諸作であり、戦後では「猿と本質」（一九四八）から始まって「アドウニスとアルファベット」（一九五六）に至る諸作であろう。殊に近作としてこの小論に取り上げた「知覚の戸」、「天国と地獄」、「天才と女神」、「アドウニスとアルファベット」の四作は、要するに「非我」の特質或はその理想実現の方法について評論或は小説の形式で述べているのである。そしてその理想達成の障壁となっている現在「自我」の抱く諸々の欲望或は煩惱、換言すればハックスレイの所謂「否定的感情」を排除する手段としては、「目的と手段」以来「無執着」non-attachmentの徳を唱えている態度は今日もなお根本に於て変っていない。所がこのような障壁は、前述したような両棲的存在物であるといった人間の性格のうちに発生契機がひそんでいることを忘れてはならない。だから、この障壁となっているものを「否定的感情」に帰し、その対策として今日まで唱導して来た「無執着」と云う消極的手段に満足しないで、近年はその障壁に関する観点を人間社会に於て「言語」が醸す

禪に關しては、悟とは「無意識を意識することである」と云う鈴木大拙博士の言葉を引いて、これは「自我」や諸々の低次の「非我」を超えた究極の「非我」に到達することであつて、われわれ個人生活の究極的目的である。所が日常の我々は、自我意識や潜在意識によつて醸された暗闇のために「非我」の光明が隠されている。この仮我の暗闇から脱出して真実の自我である究極非我に達するのが禪の目的である。そしてこの仮我である諸々の自我意識や潜在意識の実体は、現実の間接な経験とか、因襲的思想とか、いろいろな感情とか、内外に關する固定觀念との混合物であつて、こう云つた諸々の仮我から脱却した「無心」の境地に這入る、換言すれば「心貧しきもの」とか、エックハルトの所謂「処女」virginityになることが見性開悟或は究極理想の「非我」に達する王道であるとハックスレイは云つている。

筆者は先きにハックスレイの「見る技術」は、彼の生涯に於て深い意義があると云つた。次にその意義に就いて少し考察して見度い。ベーツ博士の視力再教育法によつて彼が得たものは、視力改善と云つた生理的效果ばかりでなく、「非我」の実感であつたことも先に述べた通りである。この「非我」はハックスレイの列挙した色々の非我のうちで「肉体的非我」vegetative soul or not-selfに屬するものであつたけれども、それを通して彼は更に究極の「非我」を遙かに望見し理想とするようになったのである。これは明かに彼の東洋神秘主義、殊に禪的態度を物語つていると思う。こう云つたハックスレイの禪的思想は彼の以前の作品のあちらこちらで見られぬでもなかつたが、それまではどちらかと云えば、彼の百科全書的な知識と云う借り物の感を与えぬでもないものであつて、それが彼の作品で本格的な彼の思想のあらわれとして感じられるようになったのは一九三六年の小説「ガザに盲いて」以来である。それは、主人公アントニーならぬハックスレイの回心的境地を盛つた作品と云うべく、続いて翌年それを理論化したものと考えられる評論「目的と手段」に於て「無執着」の徳を説き、また一九三九年の「幾夏すぎて」と一九四二年の

「時は止まねばならぬ」の二つの小説に於ては、前者でプロポター、後者でブルーノーと云つた無執着の人物が描かれてゐる。この神秘主義的傾向は一九四六年に最高潮に達し、彼の東洋神秘主義乃至禪的傾向を裏づけるために「永遠の哲学」が出版された。標題の永遠の哲学とは、あらゆる存在の根本原理である所の「内在する永遠の我」を認める人間の学問と云う意味で、それに関する古来東西の神秘主義者からの引用文を集め、それに彼自身の評言を附して編んだ一種のアンソロジーである。こう云う彼の精神と態度はその後も今日まで依然として続いている。

然らば問題は、ハックスレイの回心は何が動機となつたかである。一体ハックスレイの神秘思想に関する知識は、知識欲旺盛の彼のことだから、「永遠の哲学」によつても分る通り以前から東西の文献を漁っていたらしく、また無執着の思想は早く一九二九年の「汝の欲する所をなすとも」に於けるパスカル論の準備中に芽ばえたと云うことである。但し「ガザに言いて」のなかで描かれてゐるアントニー回心の動機となつた所のミラー博士は、一説にヴェンダング哲学の信奉者ゼラルド・ハードとも云われて居るし、また時代的にはイタリアのエチオピア侵略に刺戟されたとも云えるだろう。(彼の無執着の徳の表裏となつてゐるものは彼の平和主義であつて、「ガザに言いて」と同。殊に禪に関しては鈴木博士のものを以前から読んでいたとのことから、これも忘れてはならない重要な一要素と考えられる。のみならず先に云つたように、ハックスレイが「非言語的教育」のために禪と列べてベーツ法を推奨してゐる所を見ると、この視覚再教育法もハックスレイの回心に一役買つてゐるのではないかと想像される(ベーツ法が生理的效果のみならず環境征服の精神的目。由を手えたと云う彼の述懐によつても想像される)。ただ併し、「見る技術」が出版されたのが一九四二年で、その序文によれば正式にベーツ法の指導を实地に受けたのは一九三九年とあるから、「ガザに言いて」の出た一九三六年との間に少し時期のずれが見られる。然しながらそれより以前の一九三四年と一九三五年にハックスレイは中央アメリカとアメリカ合衆国に旅行してゐるし、またベーツ法に関する文献がそれ以前に既に世間に多く出ており、殊にベーツ博士自身の書いた「眼鏡のいらぬ完全な視力」がニューヨークで一九二〇年に出版され、またC. C. プライス著「自然な方法による視力の改善」が一九三四年にロンドンから

出版されている所を見ると、「ガザに盲いて」が書かれた前にすでに、ハックスレイはベーツ法のことを、彼の闘病生活に於てこれ等の文献を読んで知っていたのではないかと想像されるのである。従つてベーツ法の説いている原理と技術とが先きに筆者が挙げた当時の事情と一所になつて、「ガザに盲いて」におけるアントニーの回心に役立つたのではないだろうか？ これは、飽くまで科学的根拠に立たない筆者の単なる推論であつて断言出来る事柄ではなく、「見る技術」のなかに披瀝されているハックスレイが体験した「非我」の実感とかねて彼が持つてゐる禪に関する知識とによつて、筆者が後からものした想像論に過ぎない。従つてこの推論の是非は将来の課題として残しておき度い。兎に角、以上が筆者の云う「見る技術」がハックスレイの生涯に於て持つ所の第一の意義である。

その第二の意義として、次にこの「見る技術」とそれによつて総括されるベーツ博士の視力再教育法の体験が、ハックスレイの思想と文学に及ぼした影響について述べて見たい。第一の意義と思われるものは、前述したように、あくまで筆者の推論に過ぎなかつたけれども、ハックスレイがベーツ法を体験した限りに於て、今度は次のことが断言出来ると思う。ハックスレイは、現代文明の呈する諸々の弊害なるものは、要するに、人間が種々の欲望と概念に捉われて人間の本質を失つた所に発しているとし、その著しい例は誤つた科学精神に毒された民主主義と共産主義であると云う。これは「科学、自由、平和」(一九四七)や「猿と本質」(一九四八)などに於て彼が指摘している所のものである。欲望と云い、概念と云い、科学と云い、知識と云い、これ等のものに毒された現代人は、日常生活に於て言葉に捉われ過ぎた姿としてあらわされている。勿論言語は人類生活にとつて無くてはならぬもので、人間はそれによつて動物と区別される。文明と文化を築き、それを過去から現在、現在から未来へと伝えて行くのは言語のおかげである。所が言語には自ら限界があつて、深遠な宇宙の實在を悉く伝えることは出来ない。と同時に言語には、全体から分化歪曲し、實在から抽象離反する破壊作用の面がある。これ人間が神でない所以である。このように人間は言語

を持つが故に動物に優り、それあるが故に神に劣るのである。このようにして人間は物そのものを見ることが出来ないで、物をあらわした言葉そのものに捉われていろんな弊害に悩む。こう云った人間の両棲的性格とそれから生れる悲惨な運命を、「アドウニスとアルファベット」に於てあの宇宙の生産力を象徴するアドウニス伝説に縁が深く、またアドウニスとその女神を祭るシリアのビプロスの町にそのかみ始めてアルファベットが発明されたと云う皮肉な事実のうちに暗示している（同書の「アドウニスとア」の章参照）。こう云う人間はまた知識 knowledge によつて悟性 understanding を失う傾向がある。われわれの古い経験から生れた觀念の集積が知識であり、この知識から解放されて日常生活に於けるわれわれの新しい経験、時々刻々現象となつて生起する實在の神秘を直接に感得するのが悟性なのである（同書の「知識と悟性」の章参照）。所が事実人間はこのような知識から仲々脱却することが出来るものではない。知性の持つ魅力は人間にとつて

価千金である。のみならず知識は感情と結びつき、いろいろな記憶となつて我々を束縛する（ハックスレイに依れば、ワーズワースのような感情的記憶は、ともすれば信念や信仰に関する形式的概念や象徴的行動に固定化或は組織化）されて、いろいろ宗教的、政治的、文化的伝統となつて人間を束縛する危険があると云つてゐる）。古典とても今日まで文化の建設に役立つて来たけれども、これに余り拘泥すると、言葉の場合と同様に却つて人間の自由を奪う。だから現代の言語に偏した教育に

対して、出来る限り言葉、概念、記憶、知識から離れて現實に於ける直接経験を味わしめ、ハックスレイの云う「非我」の實感を体得させようとするための「非言語的教育」を「知覚の戸」以来の種々の作品のなかで強調してゐるのである。かく知識は古い経験の概念とその記憶であり、従つて間接経験であるのに、われわれはそれに捉われて悟性を害ひ明知の光りを曇らせているとハックスレイは指摘したが、彼は更に進んで人間、殊に知識人は、眞実に関して間接経験に外ならない知識を以て直ちにその直接経験であるとする、換言すれば知識即悟性と云つた誤謬を犯していると云う。これは十五夜の明月を見て、それに差向けられた指を以て月そのものであると観ずる態度である。この知識即悟性の態度は、自分の愛好する知識とそれを現わす言葉を過度に尊重するようになり、それは聽てドグマの偶像的崇拜を讓成し、信仰や思想の統一化えと人間を驅つて行くだろう。こう云つた現代知識人の犯す實在の知識即

実在とする誤謬とそれに起因するもろもろの人間の虚妄とを非難するハックスレイの態度は、すでに一九三〇年に出版された「文学の卑俗性」のうちにその萌芽が見られる。そのなかでは、自分が実際に感じている以上に意識的に表わしたり、自分の主張を大げさに強調する作家、例えばポー、バルザック、ディケンズを俗悪として非難し、就中バルザックの神秘主義に関する知識は単に抽象的知識に過ぎないのにそれを余りに強調している態度を攻撃している。これはまた、ハックスレイ自身をも含めた現代知識人の欠点である所の、知識即実在と云う態度に対する反省と考えられるのである。だから彼の「見る技術」とそれに述べられているベーツ法の体験は、「永遠の哲学」に集約された神秘主義に関する彼の豊富な知識に対して、眼病治療と云う偶然的出来事によって、凶らずも無意識のうちになされた反省となったのであり、また神秘主義に関する従来の抽象的意識であったものを幾分でも実証しそれを骨肉化する機縁になったと云うことが出来ないだろうか？　これが「見る技術」の持つ第二の重要性である。

この知識即実在とする知識人ハックスレイに対して「見る技術」が持った重要性は、また「知覚の戸」とそれに述べられているメスカリン服用体験にも同じく見られるのである。只両者の間に異なる点は、知識即実在の態度に対する反省が、「見る技術」に在っては眼病治療と云う偶然事から、即ち彼の所謂「恩寵」とでも云うべき働きによって無意識のうちになされたのであるが、「知覚の戸」にあつては「非言語的教育」の一環として、自分から進んで実験台に上ると云つた意識的行動による反省だったのである。そして此処に注意すべき点は、メスカリン服用によってハックスレイが体験したと云う「存在自体」Isigkeiricの状態は、果して禅の云う開悟の境地と全く同じものであつたらうか？　と云うのは、その実験報告書である「知覚の戸」の中で彼はメスカリンに依る存在自体的境地は、プラトーのアイデアのような静止的且抽象的觀念の世界でもなく、また人間最高の目的である「開悟」enlightenmentや「至福直観」Beatific Visionそのものでなく、それはカトリック神学者が呼んでいる「無償恩寵」gratuitous grace (英文学界論第二卷)

一七九頁「人文」
 第一卷「六頁参照」と呼んでいるもので、期せずして自然に内界と外界が一体となりその瞬間に永遠を感じる境地であつて、これは救済に是非必要なものではないが、その助けとなるものだと云う。なぜならその間丈けでも、それによつて我々は平素の言語や、概念や、知識の世界から解放されて「大我」Mind at Large を垣間見ることが出来るからである。「天国と地獄」に於てはこれを亦「直観的經驗」visionary experience と呼び、これは神秘的經驗即ち開悟の境地と同じではないとハックスレイは云っている。開悟と云う神秘的經驗は現実の対立の世界を全く超越するものであるが、直観的經驗は対立の世界から超越してはいない。だからそこでは天国が地獄と共に存在し、その天国と雖も地獄と同じように完全な自由解放の世界ではない。ただ諸々の我欲と觀念に束縛された個人の存在よりも、そこから神の国——究極の「非我」の世界が比較的明瞭に望見せられる「有利な地点」vantage point であると云っている。つまりメスカリン服用による存在自体的境地とか「天国と地獄」の直観的經驗なるものは、先に挙げた「非我」の分類のうち第五の「直観的非我」に相当する（二四頁参照）。即ち日常生活に於ける自我意識を超えてはいるが、第六の「普遍的非我」の一步手前の境地である。実生活に於て、そこから理想を望見しそれに向つて人間を駆り立てると云つた能動的 operational なものである。「知覚の戸」に於けるハックスレイの言葉で云えば、完全な明光が啓示的に示現する過程であり、これを仏教的に云えば、仮相の世界から超越した阿羅漢アルハムトの住む涅槃の世界ではなくつて、絶対と現象を同一に眺め、現象の一つ一つによつて仏心が慈悲の行動に発動する菩薩の世界である。煩惱即菩提と観じた境地でなければならぬ。こう云つた境地を體驗するべく、ハックスレイが自ら進んでメスカリン服用の実験台に上つたと云うことは、其処に彼の作爲的な芝居的な態度とか、薬品によつて得られた境地が擬似的なものと感じられるけれども、これは彼が日頃批難している知識即実在と云つた彼自身をも含めた現代知識人に対する反省的行動であり、警鐘的意義を有したものであり、と同時に一般神秘主義に対するハックスレイ自身の立場を明かにしたと云うことが出来る。

以上述べて来た所から分るように、ハックスレイの他者或は「非我」の思想は、東洋の神秘主義、殊に禅の思想に大へん似ている。その由来する所を内的、外的契機からいろいろ考えて来たのであるが、こう云った彼の禅的思想が何処までが単なる彼の知識であり、何処までが彼の体験であるかを厳密に区別することは出来ない。殊に彼が果して實際本格的な禅の修行をしたのであるか、それは単なる間接的知識でそれを参考にして彼独自の生活体験から展開したものであるのか、従つて彼の「非我」の思想が禅の「開悟」とか「見性成仏」などと全く同じものであるか否か——これ等は厳密にせんさくを要する問題である。併しながら彼の神秘的思想が仏教的、殊に禅的特色を多分に有していることは言を俟たない所である。例えば、禅は「拈葉微笑」を以て始まると云う。釈迦はその弟子迦葉に向つて、それまでひねくり廻していた花を微笑しながら「不思議な法門を汝に渡す」と云つて渡したそうである。「不思議な法門」とは無限の真理であり、悟の境地であり、真実の世界であつて、これは文字によつて示すことが出来ない、教えにもあらわせない、教えの外に於て伝えられるもの、所謂「不立文字」、「教外別伝」である。それから、仏とは「双手の声」とか、「麻三斤」とか、「庭前の柏の木」であるといふのは皆この類である。ハックスレイも「庭前の生垣じゃ」と云う師家の言を引いて、本質に於て自然と人間の同一性を説き、文字や概念から離れて直観、即ち直接体験によつて現実のうちに「非我」を看取しようとするのである。

それから禅では「無」を云う。これは哲学で云う「有」に対する「無」ではない。強いて云えば「絶対無」であり、これは亦「絶対有」でもある。だから「無」とは「一切空」である。凡ゆるものを否定して「無」と感ずる時は、妄想的な感覚や意識の執着が無くなる。貪欲、性欲、財欲、名譽欲、權勢欲などに対して所謂「無執着」の状態になり、心は晴々と自由になり、真実の自己の姿を発見する。これが「見性開悟」の体験である。即ち禅の無心はまた現実に対して無執着になることである。ハックスレイは、ベーツ法に於て、「否定的感情」から解放されると云う

訓練によってこれを体験し、環境に煩わされない精神の自由を体得したのである。この境地を、彼はエックハルトの言葉に因んで「処女性」virginityと呼んでいる。「処女性」とは仮我がおうわれている五欲の塵埃を打払い、いろいろの偏見や概念から解かれた「心貧しき者」になった心境である。だからハックスレイの提唱する「非言語的教育」の真髄は、言語や概念から、知識や思考から離れて、経験に直接応ずることの出来る「処女の無心」a virgin not mindを体得させることであると云う。それは我々の仮我が呈する色々の「はからい」に依るのでなく、「非我」によって cogitor される境地を体得させることである。

次に禅の開悟に「頓悟」と「漸悟」と云うのがある。坐禅して「双手の声」とか「闇夜に啼かざる鳥の声」と云った超論理的な問題を解いてハッと悟るのが「頓悟」であるが、何も坐禅するだけが「見性開悟」の唯一の道ではない。平常心是れ道で、実生活に於て妄想とか煩惱と云った仮我の化粧をぬいで自己をごまかさず、自己の本性即ち真我の姿を体得する。これが「実修漸悟」である。ハックスレイも亦「処女の無心」に到達するためには、只煩惱の塵を払おうと試みるだけでは十分ではない。またそうすることは實際六ヶしい。現実を脱しようとするほんとうの道は、現実を避けないでその中に突入するより外にない。それは現実に於てその時その時に起る問題に、抵抗しないで専心突入することである。現実や煩惱を通して真実を見ようとする、換言すれば煩惱即菩提の態度である。これはハックスレイがベーツ法の「能動的弛緩」(一頁参照)から学んだ恵知である。只の弛緩によって緊張をほぐすばかりではない。弛緩と活動を旨く組合せることによって始めて緊張をほぐし、心身の活動を促進させることが出来る。と云った心理的技術である。これはゴルフ、演劇、声楽、ダンス等凡ゆる技術の世界に見られる所謂「コツ」の実態である。ハックスレイは「非言語的教育」の分野に重要な技術として取入れ、「正しい活動は弛緩である」と云う命題によって我々に人生の恵知を訓えている。この心理的技術、即ち人生の恵知に関してハックスレイは、エックハルトの言をいろいろ引用して次のように論じている。

「仏陀を求める者は、仏陀を見ず」。「自ら仏陀たらんとする者の仏陀は輪廻である」。「道を求める人は、道を得ず」。真如に入らんとすれば、直ちに迷う。「わが身を救わんとすれば、それを失う」。それは努力逆行の法則の一例である。何か事をしようと思つて専念すればする程、成功は覺束ない。熟練とその成果は、行為と無為の同時的実行と云う、弛緩と活動の組合せと云う、内在的且つ超越的未知量の開現のための人間脱却と云つた逆説的技術を学んだ者のみ生にれる。我々は自分で理解することは出来ない。我々のせいぜい出来ることは、理解が我々に生れる精神状態を培うことだけである。」

“If you look for the Buddha, you will not see the Buddha.” “If you deliberately try to become a Buddha, your Buddha is samsara.” “If a person seeks a Tao, that person loses the Tao.” “By intending to bring yourself into accord with Suchness, you instantly deviate.” “Whosoever will save his life shall lose it.” There is a Law of Reversed Effort. The harder we try with the conscious will to do something, the less we shall succeed. Proficiency and the results of proficiency come only to those who have learned the paradoxical art of simultancously doing and not doing, of combining relaxation with activity, of letting go as a person in order that the immanent and transcendent Unknown Quantity may take hold. We cannot make ourselves understand; the most we can do is to foster a state of mind in which understanding may come to us.

目的を實現しようと思せば、思はざる程目的を見失ひ、対象に近づこうと思せば、思はざる程対象から遠くなる。そう云ふ

た無理に見よう、無理に近づこうとする自我の「はからい」を脱した努力、換言すれば「無努力の努力」とも云うべきものがハックスレイの云う心理的技術であつて、これは「非我」に至る恵知である。かく「非我」に至るには自我否定が重要な条件であるが、だからと云つて「非我」は自我の外にあるものでなく、自我を無視することは出来ない。それは自我に内在する真我或は大我である。だからほんとうに究極的非我を得るためには、自我の実態を知らなければならぬ。そしてハックスレイに依れば、この自我は現在の自我意識と諸々の「非我」から成っているのがその実態である。こう云う自我の実態に關する認識を、ハックスレイは全体的自覚 *whole awareness* と呼び、「普遍的非我」に到達し、或は「処女の無心」を得るに必要な精神的状态であると云う。換言すれば、それはハックスレイの云う心理的技術である人生の恵知をして完全にその職能を果させるに必要な精神的な場と云うべきものであらう。そしてハックスレイは、この「全体的自覚」の発動を我々に促すために、「汝自身を知れ」と云う古來の命題を持出して「アドウニスとアルファベット」のなかで次のように云っている。

「汝自身を知れ」は文明と共に生れ、また恐らくそれよりも遙かに古い一つの忠告である。この忠告に従うためには、人間は単に内省に耽るだけではいけない。私が私自身を知ろうと欲すれば、私の環境を知らねばならない。と云うのは、肉体として私は環境の一部、即ち他の間にある一つの自然物であり、そして精神としての私は、主として、環境への即応とその第一次反応への第二次反応とから成っているからである。事実「汝自身を知れ」は全体的自覚への呼びかけである」

“Know thyself” is a piece of advice which is as old as civilization, and probably a great deal older.

To follow that advice, a man must do more than indulge in introspection. If I would know myself, I

must know my environment; for, as a body, I am part of the environment, a natural object among other natural objects; and, as a mind, I consist to a great extent of my immediate reactions to the environment and of my secondary reactions to the primary reactions. In practice "Know thyself" is a call to total awareness.

即ち我々自身を知るとは、肉体的作用その他いろいろの「非我」の働き(第一次反応)や、それに応じて発生する現在の自我意識(第二次反応)から成立している自我全体を知ると云うことである。そうした時、第一に分ることは、自我と呼ばれるものの限界と愚鈍さである。

「全体的自覚は、一言にせば、自分の無知と無力の自覚から始まる。自分の脳髓におけるどんな電気化学的現象でハイドンの四重奏とか、或は、例えば、ジョン・ダークに関する思想を知覚するのか？ 自分には少しも分らない——また他人も分らない。或はもつと遙か簡単に見える問題を考えて見よう。自分は自分の右手を持上げることが出来るか？ 答は、否、自分は出来ない、自分に出来るのは命令するだけであって、実際持上げるのは誰か他の者である。誰か？ 自分は知らない。どういふ風にして？ 自分は知らない。そして自分が食事した時、パンやチーズを消化するのは誰か？ 自分が切傷をした時、その傷を癒すのは誰か？ 自分が眠っている時、疲れた体に元気を回復し、精神の混乱を正常に戻すのは誰か？ 只自分に云えることは、「これ等のことは何れも自分には出来ない」である。」

Total awareness starts, in a word, with the realization of my ignorance and my impotence. How do electro-chemical events in my brain turn into the perception of a quartet by Haydn or a thought, let us

say, of Joan of Arc? I haven't the faintest idea — nor has anyone else. Or consider a seemingly much simpler problem. Can I lift my right hand? The answer is, No. I can't. I can only give the order; the actual lifting is done by somebody else. Who? I don't know. How? I don't know. And when I have eaten, who digests the bread and cheese? When I have cut myself, who heals the wound? While I am sleeping, who restores the tired body to strength, the neurotic mind to sanity? All I can say is that 'I' cannot do any of these things.

即ち、我は考えられる(cogitor)。その自我を考える「非我」は、繰返して云ったように、自我の外に在るのでなくして、実は自我に内在する。それは外ならぬ只自己の無知と無能に眼覚めることから直観される。これが全体的自覚なのである。

最後に附言すべきことは、こう云ったハックスレイの全体的自覚に於ける「非我」の思想には、精神と肉体の二要素が考えられていることである。そこには常に肉体的自我と精神的自我とが、車の両輪のように考えられている。この心身両面的な観点は、これに限らず、ハックスレイの思想の一つの特色である。それは、健全な自我は精神的非我と肉体的非我との調和の上に立っていなければならないと云い、また彼は「非言語的教育論」に於て人間を「心身の器具」psycho-physical instrumentとしてその訓練を論じているのを見ても窺われる。肉体は自然の一部である。こう云う肉体と精神の上に立った全体的自覚であり、「非我」である。禅の開悟と雖も決して肉体を無視しない。肉体は開悟に至る導体として考えられている。だが禅の開悟には、どちらかと云えば、自然物の要素が重大な役目を果している。禅は先に述べた「拈華微笑」のように、自然物と肉体との超論理的融合を以てその特色とする。そしてハッ

クスレイの神秘思想にも、こう云った禅的自然観もないではない。例えば「知覚の戸」に於ては、花瓶の生け花、椅子、シャグマユリ等による「存在自体」的な体験を告げ、「天国と地獄」に於ては「直観的経験」に縁の深い工芸品的要素のガラスとか寶石のこと、進んでは静物画や宋画の持つ禅的特色を論じるなど、彼にも禅的自然観は見られる。が併し彼の神秘思想には、その上に更に彼の「全体的自覚」に考えられている自然がある。これは肉体のうちに在って生理作用を行っている自然の力であり、これは禅の自然観にはない特色である。そして、この自然力をも含めたいいろいろの「非我」の上に成立しているハックスレイの所謂「非我」の思想は、禅に見られない特色であつて、これはまた彼の神秘思想を考える上に忘れてはならぬ重要な点である。

この小論に取扱つたハックスレイの近作とは

「知覚の戸」 *The Doors of Perception*, (1954)

「天才と女神」 *The Genius and the Goddess*, (1955)

「天国と地獄」 *Heaven and Hell*, (1956)

「アドウニスとアルファベット」 *Adonis and the Alphabet*, (1956)

その外ここに言及した旧作としては

「汝の欲する所をなすとも」 *Do What You Will*, (1929)

「文学に於ける卑俗性」 *Vulgarity in Literature*, (1930)

「ガザに言つて」 *Eyeless in Gaza*, (1936)

「目的と手段」 *Ends and Means*, (1937)

「幾夏すぎて」 *After Many a Summer*, (1939)

「他者」の思想

「見る技術」 *The Art of Seeing*, (1942)

「世に止むべき時」 *Time Must Have a Stop*, (1942)

「永続の哲学」 *The Perennial Philosophy*, (1945)

「科学・自由・平和」 *Science, Liberty and Peace*, (1947)

「養と本質」 *Ape and Essence*, (1948)